

言語能力の育成に効果 新聞活用 定着の息吹

長野県新聞活用教育推進協議会長
信州大学教育学部教授
渋沢 文隆



学校教育の今日的課題の一つに言語能力の育成がある。このため、国語科だけでなく全ての教科等の学習指導や学習活動で言語表現が意識され、指導の充実が図られている。その一環として新聞活用も視野に入り、N I E の活動に追い風が吹いている。この機会を生かし、「新聞を学校教育で効果的に活用するとは？」を問い、ブームではなく確かな定着をめざしてN I E の普及・拡大を図りたいと考える。

言語能力は、「聞く」「話す」の音声言語の領域と、「書く」「読む」の文字言語の領域とに、大きく二分される。そして、新聞活用は、作文などと共に、基本的には文字言語を対象にした領域での学習活動となっている。ただし、新聞と作文を、表現の観点から比較すると、それぞれには独自の特色がみられることがわかる。それは裏を返すと、どちらか一方ではなく、両者の特色を生かした学びの場を適宜設定し、その充実を図っていくことが、文字言語の育成にかかわる学習指導のポイントになっていることを意味している。

新聞は、5 W 1 H の用語に象徴されるように、現代の日本や世界の各地で生起している事実、出来事等を主対象に取材し、それらをいかに正確、公正に伝えるかを課題にしている事実認識の世界である。そして、見出し、リード文、本文の三段階で構成し、読者は関心や必要性等に応じてどの段階まで読むかを適宜判断して読んでいる。見出し、リード文は端的さが問われる要約、要旨の世界であり、全文を読むことが必ずしも期待されていない。この学習成果は実験、観察や各種の調査などに基づくレポートの作成などに活用、発揮される可能性大である。

それに対していわゆる「作文」は、論説や論文といった主張の世界ではなく、作者の思い、心を重視しており、取材というよりも体験に基づいた情意の世界を大切に文となっている。そして、起承転結などに留意して構成を工夫し綴っていくことが要請されている。このため、作文は、部分ではなく、全文を読むことが前提である。作文のタイトルは、要旨というよりも作品のシンボリックな位置づけにあり、感性や印象を考慮したネーミングとなっている。だから、タイトルを読んでもあまり作文の内容を推測、把握することはできず、逆に全文を読んでからタイトルをみると、「なるほど」と妙に納得するようなものとなっている。作文の学習成果は感想文などを書く時に大いに活用されよう。

このように新聞と作文ではえがく対象、世界が異なっている。裏を返すと、言語能力の育成には、作文だけでなく、新聞活用も導入した方が効果的であるといえる。5 W 1 H による事実の記述、要約や内容を端的に表現するなどといった表現力は、新聞を活用した方が効果的であり、新聞が格好の教材となり得るということである。新聞は表現力の育成において万能ではないが、こうした特質、役割を考慮して大いに新聞活用を促したい。

今年度も良質の新聞活用の実践研究が出揃いました。信州にも地に足をつけたN I E が定着しつつある息吹を感じます。関係者の皆様に深甚の謝意を申し上げます。なお、私事です私はこの3月で信州大学を辞め、東京に居を移しました。このため、本協議会の会長も辞退させていただきました。10年間、大変お世話になりました。素晴らしいN I E の実践にたくさん出会えて幸せでした。ますますの発展を祈念致します。